

平成30年1月1日発行 春燈/第73巻第1号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可

春燈

2018 January

1月号



主宰の句

安立公彦

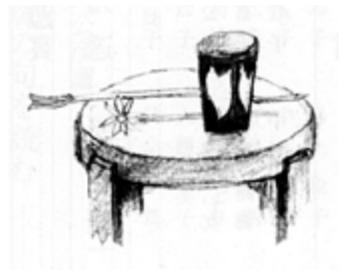
残る虫弘法寺の階踏みゆけば

ゆく秋やこころ癒せと夕茜

しぐるるや灯台影のごとく立つ

玲瓏の面影いままも一葉忌

冬銀河仰ぐや身の錆いつか失せ



成瀬櫻桃子の句

読初や「ルルドへの旅」子に聞かす

「春燈」平成十二年

ノーベル賞受賞医アレクシー・カイル著。フランスのルルドで不治の病にある一女性に起きた奇跡についての書を愛娘に読み聞かせている「読初」の景。親が子に読み聞かせをするのは大いなる暖かな幸せのかたちの一つには違いない。家で新年を迎えた、この時四十四歳である美菜子さんに寄り添う櫻桃子の愛情に満ちた柔らかな声が想像される。この二年後に美菜子さん逝去。

藤原若菜

成瀬櫻桃子の句

したたりの短き命かがやかす

『風色』昭和四十二年

一滴ずつ光を抱きながら落ちる滴りは美しい。その滴りを、「短き命」の輝きととらえ、一瞬の美しさを切り取った煌めくような感覚の写生句。一方で「短き命」は愛娘美菜子さんのおそらく短いであろう命であり、「かがやかす」には、我が子に輝くように生きてほしい、その人生に光をあて輝かせてあげたいと願う悲痛な親心、切実な愛があふれているように思えてならない。

小山 繁子

燈下集



○ 宮沢治子

小流れに揺るる木洩れ日草紅葉

爽やかや園児の渡る赤い橋

山粧ふ峠の茶屋の串団子

黄落やメトロノームの無表情

マイナンバーの登録すまます文化の日

○ 府川昭子

夕風の残してゆける枯葉の香

山茶花に水がだんだんかたくなる

面影のふとよみがへる秋海棠

落葉掃いつしか無心になつてをり

慰鶴やつて来る日を待ち侘ぶる

○ 永島雅子

残る蚊に纏はれつつの庭手入

新酒注ぐ上戸の父の墓石かな

石畳音なく濡らす秋時雨

ゴンドラを吸ひ込む山頂霧深し

姉妹の話尽きざる夜長かな

○ 片山博介

「帰去来辞」や秋空は藍深め

もう翔べぬ雀はあはれ蛤に

波に聞く貴種流離譚秋の浜

星流れ丹波は闇を深くせり（悼・四方春江さま）

よもすがらすだまの落とす木の実かな

○ 鈴木撫足

曼珠沙華地の靈熱き迸り

木犀の香や去りがての立ち話

無人駅野菊を活けし瓶ぼつり

淡々と老いて二人や颯雲

障子貼り真白き明かり溢れしむ

○ 矢口笑子

ペーカー街へつながらる扉秋灯

ホームズの推理の視点木の実落つ

転がつて運切り開く木の実かな

鳥渡る三街道の分起点 (旅吟二句)

古戦場の木の実ひとつを拾ひけり

○ 都丸美陽子

菊日和竹刀打ち合ふ体育館

草の中枯蠅螂のひそみけり

鯨日和足垂れて釣る子がふたり

秋怒濤五浦の浮標さまよへり

山畑の入り日一気や蕎麦を刈る

○ 松山三千江

秋祭いつも通りにバスを待つ

田畑(でんばた)なり田畑にあらず豊の秋

駆込みに険しき磴や杜鵑草 (東慶寺)

御仏をしづかに包み秋ともす

秋寂びの手児奈の町を巡りけり

○ 赤羽陽子

水揺れて秋の気配の始まりぬ

遠山に霧の晴れゆく旅日和

踏切を越えて花野に着きにけり

石垣に桜紅葉を散らす風

青空へ広い空へと赤とんぼ

○ 篠原幸子

秋の灯をともしてみたし清洲橋

脳トレをもて余しをる夜長かな

昔よりいつも二番手運動会

ひと足を踏み出せぬまま残る虫

通るたび美男かづらの染まりゆく

○ 藤原若菜

出張の夫への朝茶草ひばり

本堂につづく廻廊昼の虫

老杜氏の片頬の笑みや水の秋

白秋や祢宜の妻女の割烹着

秋渴きハロウインの口並びをる

○ 大文字孝一

残る虫地図にも載らぬ出城址

鴉鳴くやモダンアートの賛否論

高楼の四方開け放ち秋澄めり(水戸旬)

家系図に生母の名あり秋深む

天高し筑波嶺望む藩主の間

○ 和田絢子

童子仏に散らばる銭やみのこづち

足場板揺らして試す松手入

菩提寺の閑伽桶ほてい草咲かす

能登の海遠くは見えず秋霞

鯉跳んで能登金剛の波高し

○ 神田恵琳

白秋の草舎たづねむ十一月

磨ぎ立つる大黒柱冬に入る

貧と富の縷ひ交ぜの幸新酒酌む

秋気澄む水に沁み入る阿弥陀教

いづくまで直なる道ぞ銀杏黄葉

○ 小山繁子

日に遊び風にあそぶや萩の花

誰にでも等しく秋日注ぎけり

木洩れ日の径や秋思の靴の音

吾亦紅過疎の暮色を深めけり

秋深し鏡に映す天邪鬼

○ 小島昭夫

同胞と「故郷」歌ふ秋彼岸

吊皮にネイルアートの白さやか

山粧ふ農機具洗ふ大男

敗荷の続く車窓や常陸みち

初霜や畔にスマホの農婦佇つ

余言

安立公彦

ゆるぎなき故郷の山河豊の秋

佐藤 信子

「ゆるぎなき」は、全幅の信頼の形容である。その対象が「故郷」、しかもその「山河」とあると、句を鑑賞する私たちも、この上五に深く頷くばかりだ。人はみな古里を持つ。それが都会であれ、地方であれ、その人にとって、古里は年月を深めるにつれ、こころの支えの一方を為すものと言えよう。その支えが美化されたものであっても、むしろ美化されるべきなのが、故郷というものであろう。

この句、「豊の秋」がいい。訪れてみたい山河だ。

虚と実のあはひを遊ぶ文化の日 三上 程子

「虚と実のあはひ」とは何を指すか。「虚」は事実でないこと、いつわり。「実」はまこと、普段の生活そのものである。

こう考えると、世に「虚」は存在しないことになるが、近松門左衛門の芸術論に、虚実皮膜という言葉がある。事実と虚構の微妙な接点に芸術の真実がある、という論。小説一つを見ても、この論は納得出来よう。

この句、「あはひを遊ぶ」が一句の眼目。あはひは近松の言う、事実と虚構の接点。「遊ぶ」は、日常生活からの開放。ここに至りこの中七こそ「文化の日」に相応しい言葉と改めて理解する。この作者らしい機知に富む句だ。

生き抜きし昭和の手足秋刀魚焼く 鷹崎由未子

この句は、去る十月本部句会で特々選に戴いた作品。一句の中心は「昭和の手足」。しかも「生き抜きし」という切実な内容を持つものである。私たち全ての国民は、昭和という激動の時代を堪え忍んで生き抜いて来たのだ。

しかし作者は「秋刀魚焼く」という庶民の日常を下五に据える。この下五あって、厳しかった「昭和」という時代が回想のテーマとして、余裕をもって考えられるようになるのだ。一つの時代を表現するみごとな一句であろう。

母の忌の十日の菊となりけり 栗原 完爾

「菊」は古来、わが国における園芸上最も普及した花であり、「重陽」、即ち陰暦九月九日の節句に、この日の景物として供されて来た。重陽はまた菊の節供とも称され、そ

の関りの深さも改めて知ることが出来よう。

この句、「十日の菊」は、時機に遅れて役立たないものの譬え。母堂の命日を多忙さにかまけて、うっかり過ぎてしまったのだ。しかしこれは良くあること。淡々とした表現の中に、母堂への深い思いの感じられる句だ。

水澄むや真間の入江の名残池 武田 巨子

去る十一月三日、市川における春燈千葉支部大会での作品。R市川駅から、大門通りを弘法寺に至る道がある。案内図には万葉の道とある。弘法寺の手前を真間川が流れ、そこに架かる橋が「真間の継橋」。この一帯は古代の遺跡が形を変えて残っていて、真間の継橋もその一つである。真間川は江戸川に注ぐ。古代は海岸線も近く、この辺りは入江だったという。「名残池」は手古奈伝説に基づく手古奈霊堂に残る。古代の伝説の地を良く表現した作品だ。

待宵や波音高き旅の宿 豊谷 青峰

作者は今、旅先の旅館に寛ぐ。観光では無い、仕事の途次であろう。それはこの作者にそういう句が時折見受けられるからであり、作品としてもその方が一句に相応しい。

今夜は「待宵」。陰暦八月十四日の夜である。「波音高き」とあるから、海辺の旅館であろう。仕事も滞りなく終わり、独り窓に凭り海を見ている作者。風が出て波に寄せる波音

は荒い。この句、景が活写されている。一句の言葉の配置も的を得ている。作者の思いの感じられる作品だ。

恋多き女のたたむ秋扇 清水 美子

俳句の場合、一句の主人公は基本的に作者である。この句、中七が、「指もてたたむ」であれば作者自身を詠んだものであるが、「女のたたむ」と二人称となっているので、これは作者の知る女性を詠んだ句となる。

それにしても「恋多き女」は、小説の一場面を見るようだ。中七の「たたむ」は、小説であれば、そのあと立ち上がり行動に出るといふ、物語のピークを為すものだろう。一句良く一つの物語を秘める作品と言えよう。秋扇も又。

星流れ丹波は闇を深くせり 片山 博介

先般死去された四方春江さんへの追悼句。京都綾部の人だった。しかしこのところ死去される会員の数が多い。不順な季節の気候も影響しているのではなからうか。

作者は春燈丹波句会の指導者。それだけに悼む思いも深からう。流星は宇宙塵が地球の大気中に入り、一定の条件のもと発光するものと辞書にある。この句、「丹波は闇を深くせり」に、個人の思いを越えた、春燈関西会員に亘る悼みの思いが感じられる。

当月集

安立 公彦選



○ 荒井ハルエ

二階まで墨かをりを来る良夜かな

ふつくと豆炊きあがる十六夜

秋灯やペン掠れゆく長き文

枕辺にラジオ引き寄す夜長かな

眠られぬ一夜ちちろを共として

○ 永井恵子

みのこづち揺らし遮断機上がりりけり

秋霖やたつぷりとさす男傘

をうをうと神呼ぶ祢宜や秋祭

上げ膳の据え膳の日や秋時雨

秋嶺や着る日未だし婚衣裳（長女へ）

○ 中里よし子

露けしや捨てかねてゐる亡夫のもの

瞬きのまに蝶消ゆる路地の秋

甲州善光寺散り急ぐかに大公孫樹

冬蝶を呼ばむあまたの花植ゑて

詩の雫宿して眠れ冬の薔薇

○ 持田信子

木瓜の実や個性のちがふ三姉妹

わが影を細身に伸ばす秋入日

陸上げの小舟の手入れ秋深し

椎の実の降るや一張一弛の地

豊の秋百戸の衆の村おこし

○ 海村禮子

見ぬ国へ夜長の飛行滑走路

十六夜や渚に波打つ音尽きず

色鳥や哲学の道歩み行く

群れなして走る緬羊霧の中

爽やかに今日のひと日の始まり

春燈の句

安立 公彦選

杜鵑草群れてもさびし花の色

広島 川崎 雅子

櫨一樹谷に魁け紅葉の緋

蘭の鉢取込む軒や冬仕度

蹲踞に寄り添ふ石露の花や黄に

はつふゆや掃き寄せしものみな湿り

鳶旋回すすきの原のたゆたへる

初冬の雨に光るや能登瓦

冬草にちらちら風の遊ぶなり

朝寒や酒の名残を吹飛ばす

神渡し日本列島どつち向く

露霜や四十九日に着く訃報

寝たばこの最後の一服十三夜

冬瓜やゆつくり溶くる吉野葛

菊供養帰りに覗く組紐屋

千葉 鶴岡 紀代



いわし裂く浜の女の指の先

鱒大漁三日続きのつみれ汁

むかご飯ひとり楽しむひな暮し

柚子三ついつの間になら落ちにけり

秋ひと日結城をまとひ独り旅

つるし柿ホームに並べローカル線

黄落の大樹を仰ぐ人の波 (国立博物館)

まんまるき善膩師童子さはやかに

みほとけとの対話やすけき秋日和

運慶展出づるや上野の暮早し

末枯や旧中川の川明り

盛切の粹な飲み振り新走り

煩惱の数のきざはし秋暮るる

肌寒やはらから集ふ妣の家

千葉 大湊 栄子

神奈川 山下 健治

東京 小林 文良

